

ぶどう農家 三浦尚志さん（鳴沢村）



「多くのことにチャレンジして、将来は利用者の皆さんを雇用できるくらいに大きくしたいですね」と話す三浦尚志さん

デメリットは全くなし
事業を大きくして
障害者の方を雇用したい

山梨市内などでピオーネやシャインマスカットなどのぶどうを栽培する三浦尚志さん。就農して5年の若い農業者です。三浦さんが果樹農家を志したのは、山梨県立農業大学校の学生の時でした。実家は鳴沢村でコチョウランを栽培する花き農家で、三浦さんも当初は花き栽培の勉強をするつもりで農業大学校に入学しました。しかし、ここで果樹と出会いました。「一年の時に果樹を学んだら面白くてやってみたいと思いました」と三浦さん。

卒業すると農地を借りてぶどう栽培を始めました。「夢中でやりました。もちろん大変なこともありましたが、楽しかったですね」と振り返ります。今では農地は、甲州市、山梨市など4カ所合わせて1.5ヘクタールに増えました。三浦さんはすべて一人でこなしてきましたが、栽培面積が広がってくると、課題となるのは人手です。

そんな折に、富士河口湖町の知人から「農福連携で障害者の方をお願いしたらどうか」とのアドバイスを受けました。三浦さんは、山梨県農福連携推進センターに相談し、昨年（令和2年）から、ケア

フィットファーム（甲州市）の利用者さんに手伝いに来てもらうことになりました。

栽培面積拡大で人手不足
農福連携に活路求める

「最初は正直、大丈夫だろうか、という不安な気持ちもありました」と三浦さん。しかし、実際に一緒に働いてみると、仕事が丁寧で早くてまじめでもくもくと作業する様子に「心配が吹き飛ぶどころか、むしろ感心しました」と言います。作業の合間には会話も弾んで「一人で作業していたころよりずっと楽しいですね」と笑顔を見せます。

利用者さんには袋かけや傘かけを担当してもらっています。「手間のかかる作業ですので、それをさせていただいている間に自分は別の作業ができるようになりました。おかげで効率が大幅にアップしました。デメリットはまったく感じません」と話し、「農福連携」のメリットを強調します。今後は、傘の洗浄の依頼や収穫もお願いしていきたいと考えています。

ぶどう栽培とともに、今後はいちご栽培などにも取り組みたいという三浦さん。「多くのことにチャレンジして、将来は利用者の皆さんを雇用できるくらいに大きくしたいですね」と夢を膨らませています。



「農福連携で効率良く作業ができるようになりました」と話す三浦尚志さん

農家に感謝される丁寧さ 農福連携で広がる 障害者の可能性

社会福祉法人幸生会 エスペランサ
(甲府市西高橋町)

社会福祉法人幸生会の「エスペランサ」(甲府市西高橋町)。2018年、山梨県の支援を受けて施設に隣接する土地を開墾し、野菜の栽培を始めたのが農福連携のスタートでした。

きっかけは、利用者さんたちがいちごハウスの手伝いに行ったことでした。エスペランサでは「障害のある人に作業を通じて幸せになる道を見つけたい」との考えから、利用者さんはパンを焼いたり、シール貼りなど様々な作業をしています。

「こうした作業は屋内が中心ですが、いちごハウスの手伝いで外に出かけた時、みんな楽しそうに生き生きとしていました」と、主任支援員の赤尾悠子さん。その姿を見た赤尾さんたちは「外での農作業を取り入れてはどうか」と思い立ちました。

一枚一枚ぶどう傘の洗浄 手間のかかる仕事を熱心に

自前の農場に加えて、現在は農家からぶどうの傘かけや桃の袋掛け、収穫作業などを請け負うようになっています。ぶどうのシーズンが終わる10月くらいからはぶどう傘の洗浄をします。2軒の農家から請け負う傘は2万枚を超えます。水洗いが基本ですが、エ

スペランサでは、水洗いの他、農業者の要望に応じて、漂白剤等につけて洗浄するように工夫しています。洗浄した傘は丁寧に拭き上げ、まとめられて農家に戻されます。「傘の洗浄は手間のかかる作業で、農家の方からも感謝されています」と、支援員の天野晃成さん。

27人の利用者さんの障害の特性に応じて、職員が作業を割り振っています。従来の作業に農作業が加わったことで、作業の種類の幅が広がっています。

赤尾さんは「農作業をすることでリフレッシュできます。また人



「できる作業をもっと増やして受注先を開拓したい」と話す主任支援員の赤尾悠子さん

とつながることで世界が広がります」と、農福連携の効果について話します。さらに「できる作業をもっと増やして受注先を開拓したい」と期待します。



洗浄したぶどう傘を一枚一枚丁寧に拭き上げます